

芥川龍之介の江南体験
— 『支那遊記』における蘇州の表象を中心に—
Ryunosuke Akutagawa's Experience in Jiangnan:

With a Focus on Soochow's Representation in *Travels in China*

郭 立欣

GUO LIXIN

摘要

Ryunosuke Akutagawa, as an overseas journalist of the Osaka Mainichi Shimbun, traveled to China from late March to early July 1921, and wrote down the experience in “*Travels in China*”. “China” was a consistent theme of Akutagawa’s literature, and his “Sinophilia” laid a solid foundation of his creation in the early period. However, Contrary to the characteristics of the early period, Akutagawa’s works after his tour in China showed realism beyond the realm of mere interests. The experience in China brought about an obvious change in the style of his works mentioned above, and after his traveling around the Jiangnan region, besides his consistent word of criticism about China, Akutagawa began to express his disgust of the Jiangnan city as denied by himself that he was a “sinophile”. On the other hand, Akutagawa highly valued the city, Soochow, which was recorded in the chapter: “*Travels in Jiangnan*”. Based on the background, in order to furtherly understand the change in Akutagawa’s views about China, considering the novelty and greatness of China in the 10th year of the Republic in the eyes of one Japanese journalist lived in Taisho 10, and as a novelist, Akutagawa’s view about the real China, which was the origin of Chinese poetry and Nanga, and the stage of many novels, played a key role in this study, meanwhile, the importance of Soochow should also be considered in priority. It should be noted that the previous research so far has not paid much attention to his travels in Soochow.

This paper based on “*Travels in China*”, which Ryunosuke Akutagawa wrote when he visited China, a country at a historical turning point, and focused on the peculiarities of Soochow emerging from his Jiangnan experience to have an insight into the position of Soochow in his views. The experiences during his travel, the description about Soochow and the impressions he made, all that recorded in “*Travels in China*” were not only a part of his tour in China, but also one aspect about the impression of China that writer himself and Japanese society had. Therefore, the main purpose of this paper was to clarify part of the changes in Akutagawa’s impressions of China by deciphering the representation of Soochow, which was regarded as the special one in his Jiangnan experience.

キーワード：芥川龍之介 江南体験 『支那遊記』 蘇州表象

Keywords: Ryunosuke Akutagawa Experience in Jiangnan *Travels in China* Soochow's representation

1. はじめに

大正文学の担い手である芥川龍之介は「南京の基督」（「中央公論」1920年7月）、「アグニの神」（「赤い鳥」1921年1、2月）等の作品において、中国・江南の南京や上海をエキゾティシズムの空間に設定し、未体験の異国への想像を膨らませていた。そのわずか翌月、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国へ渡り、芥川龍之介は「大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日」の間に、上海、杭州、蘇州、揚州、南京といった江南地域から、中部に位置する九江、漢口、長沙、洛陽も含め、北京、大同、天津などの北の都市に至るまで遍歴し、その紀行文として『支那游記』（改造社、1925年）を著した。¹

『支那游記』は「上海游記」・「江南游記」・「長江游記」・「北京日記抄」・「雑信一束」を収録しており、「母」（「中央公論」1921年9月）や「馬の脚」（「新潮」1925年1、2月）、「湖南の扇」（「中央公論」1926年1月）など中国体験にかかわる小説がともに示唆しているように、〈中国〉は芥川文学の一貫したテーマであると言えよう。しかし、幼少期から『西遊記』や『水滸伝』を愛読するなど中国の古典文学に親しみ、漢詩漢文に熟達し、また中国書画への関心を持ち続けたことに基づく「支那趣味」が前期の創作の底流をなしていたのに対し、視察旅行後における芥川の中国物は単なる趣味の領域を超えたリアリズムを見せている。このような変化をもたらした中国体験を記録した『支那游記』において、芥川は「私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。」という批判の言葉に続き、自分は「浅薄なる支那趣味の恠怍者」ではない²と断言している。しかしながら、こうした江南諸都市一般に対する嫌悪の情にも関わらず、芥川は蘇州を特別視し、「江南第一」と評価している。さらに後年、中国旅行を回想する時に、「南方では蘇州も杭州も南京も漢口も見ましたが、矢張一番気に入ったのは蘇州の景で³」あったと述べていることから、芥川にとって、中国の都市の中で蘇州が際立った存在であったことは明らかである。

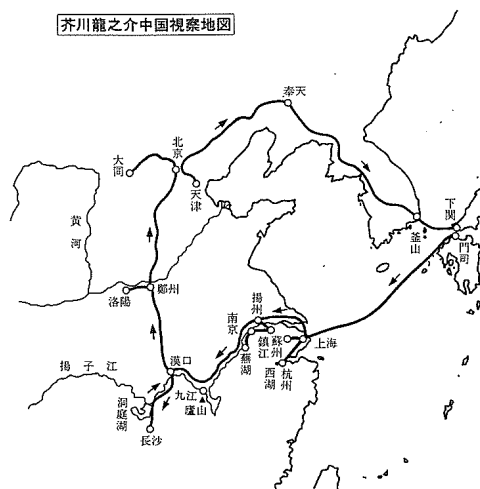


図 1⁴

芥川龍之介の中国旅行に関して、大阪毎日新聞社は「政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那

固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある」ことから、「行々想を自然の風物に寄せ」、また「交りを彼の土の新人に結」ぶことを通して、「若き支那の面目を観察」するよう芥川に期待を寄せている。しかもまた、「新人ラツセル氏やデュウイ教授」、「バルグソン教授」に張り合うように、日本からは「現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る」⁵芥川を派遣するという大きな野心も、新聞社側は抱いていたのであった。このように、1921年という時代の変わり目において、新聞界では「世界の強国」と対等であることが強く意識されていた。加えて、日本文壇は夏目漱石の死去に象徴される世代交代の只中であつた。これらの状況を背景として、新聞界、文壇では激動している中国社会への関心が高まり、積極的に作家を特派員として海外に派遣し、体験記を書かせる動向にある中、芥川龍之介がその一端を担うことになったのである。

一方、芥川自身も、「支那人は昔偉かったその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考へられぬ支那へ行ったら昔の支那の偉大ばかり見ず今の支那の偉大もさがして来給へ⁶」という友人の里見弴からの助言に同感し、その上で書かれた『支那游記』は「天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物であり、そこに浮かび上がった「僕のジャーナリスト的才能」は「少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確である」と「自序」⁷に記している。芥川の自信作とも言える『支那游記』は、当時の新聞紙や雑誌に連載されて多くの反響を呼び、その後の日本人の中国体験や〈中国〉をめぐる文学作品の創作にも甚大なる影響を与えたのである。⁸

このような背景を踏まえると、大正 10 年を生きる一日本人のジャーナリストの目に映った中華民国 10 年の中国は如何に斬新に映じたか、また小説家・芥川における中国認識の変化を読み解く鍵として彼が漢詩や南画の源流、現実の中国をどのように捉えたかを考察する場合、蘇州の持つ意味はきわめて大きいと考えられる。先行研究では、芥川龍之介の中国紀行の主となる江南という広域の中で、彼の異国小説の舞台となった上海や南京に関しては盛んに論じられてきたものの、蘇州紀行についてはそれほど注目されてこなかった。上海、杭州に続き芥川はその年の 5 月 8 日からの三日間を蘇州で過ごし、名所古跡の遊覧を主とする体験を「江南游記」の十三～二十一章にまとめている。関口安義は、「総じて蘇州は龍之介の気に入った街、少なくとも杭州よりも彼の感性に合った街であつた⁹」と指摘し、また、周芷冰は「芥川龍之介『江南游記』論：芥川が見た新しき「江南」において、「古典文学に魅了された芥川」が「異国情緒漂う蘇州の美景を克明に描き、懐古的な感動を述懐している」¹⁰と解説している。このように蘇州に言及した研究は多少見られるが、詳細な考察は未だになされていない。上海と杭州の後で訪れたこの都市に託された芥川の思い、江南の現実にも衝突しながらも蘇州を賞賛した所以は、考察すべき重要な課題と考えられる。

本稿は、歴史的転換点にある中国の地に足を踏み入れた芥川龍之介の紀行文『支那游記』を取り上げ、彼の江南体験とそこから浮上した蘇州の特殊性に注目し、芥川における蘇州の位

相を検討するものである。そのなかで語られた体験、描かれた蘇州、作られた印象は芥川の中国旅行の一部を構成し、また作家自身と日本社会の中国像の一面を完成させたはずである。芥川の江南体験の中で異質として位置づけられる蘇州の表象を読み解くことで、芥川の中国像における変化の一端を明らかにすることが主たる目的である。

2. 姑蘇城の水

「上海游記」の続編「江南游記」は1922年1月1日から2月13日まで、『大阪毎日新聞』の朝刊に連載された。そのうち、「長江游記」とそれ以降の紀行文とは芥川龍之介が関東大震災を経験した翌年以降に執筆された点で異なり、江南地域に関する記録はまだ中国旅行の記憶が鮮明な時期に手帳のメモをもとに書かれたと推定される。江南の地は古くから水郷として知られており、「水に臨んだ家家の間に、高高と反つた石橋がある。水には兩岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南画に出て来る船も、二三艘水際に繋いである」ような描写は、まさにその代表的な自然の風景であろう。上海から杭州へ向かう途中、それを「芽を吹いた柳の向うに」眺めた芥川は「急に支那らしい心持になつた」¹¹。「水」や「家」、「石橋」や「白壁」、「船」、「柳」といった要素からなる実在の水郷の景色は、想像のなかにある中国のイメージと合致し、芥川には中国らしい情緒が湧いてきたのである。江南の水郷は芥川龍之介における中国の原風景となっていたと言えよう。

しかし、紀行文を読み進めて行くと、水郷の構図に欠かせない江南の「水」は、従来のイメージと大きく離れたものとして描かれている。芥川の期待を寄せた杭州の西湖は水が浅く、「湖水なぞと称へるよりも、大水の田圃に近い」ものであり、上海では「黄浦江の水さへ見れば、必ず黄疸を思い出した」ばかりではなく、それより遥かに赤い揚子江の水の色は「金物の赤錆にそつくり」であった。また、隋の煬帝が開削した世界一長いという大運河は、「格別雄大でも何でも無い」平凡な景色と映っている。とりわけ揚州や南京の水になってくると、狭い幅と悪臭の上に水の色が黒ずんでいた川はむしろ「溝と称す」べきで、秦淮は「平凡なる溝川」であった。このように江南体験で一大要素になった「水」について、芥川はそれを意識しているように細かく記録しているが、いずれも水郷の面影は失われていたように見える。ところが、「胸中の江南」が「眼前の江南」に打ち砕かれた¹²という失望には、唯一の例外が見られるのである。

序文で述べたように、わずか三日間の蘇州旅行ではあったものの、芥川には揚州や南京などの滞在よりも遥かに豊かな経験をもたらしたようである。乾性肋膜炎の発病で一カ月ほど長く上海に滞在したため、「氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り尽した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく¹³」という当初の予定に狂いが生じ、芥川は退院後も体の具合が悪化することを心配し、「北京行きは見合せ、揚子江南岸〔下線筆者、以下同。江南地域を指す。〕

のみを見物して帰朝¹⁴」するといった計画の変更も考えていた。しかし、このような事情を背景にした芥川の蘇州の旅は、水にまつわる自然の風景のなかで胸を打たれたものとして描かれている。第一印象の中の蘇州は、狭い往来の左右にある招牌の下がっている経師屋、宝石屋には山水、花鳥、翡翠、玉などの支那物が並んでいるという城内の風景に加えて、「細細と蒼い運河の水」の光っている様子が「姑蘇城らしい、優美な心もちを起させた」土地であった。芥川は紀行文のなかで、「蘇州の水」と題して格別に「水」を取り上げて一文を草し、「蘇州はつまらない所ぢゃない」のは「ヴェニス¹⁵のやうに、何よりもまづ水がある」からだとして述べている。

「水光りと緑との見えない所はない」蘇州の「水」に言及する場面はしばしば見られるが、そのなかでも次のような描写が挙げられる。「初夏の運河に沿うた、姑蘇城外の田舎路は、美しかったのに相違ない」という感慨に続き、芥川は次のように述べている。

白い鶯の浮いた運河には、やはり太鼓なりに反り上つた、古い石橋がかかつてある。その水にはつきり影を落した、涼しい路ばたの槐や柳、或は青麦の畠の間に、紅い花をつけた玫瑰の棚、――さう云ふ風景の処々に、白壁の農家が何軒も見える。殊に風流に思つたのは、そんな農家を通り過ぎる毎に、窓の中を覗きこむと、上さんだか娘だか、刺繍の針を動かしてある、若い女も少くない。(全集八、257頁。)

「運河」「石橋」「柳」「白壁」「農家」などが作り出す伝統的な江南の水郷は、蘇州にだけ見出されたのであろう。江南を体験したのち、「支那趣味者」であることを否認しようとした芥川ではあるが、ここにいる芥川は少なくとも蘇州の「水」に「支那趣味」を感じている。蘇州の旧称として呼ばれる姑蘇の名には、「場違いの西洋」である上海や、「ヤンキイ趣味¹⁶に染んで」いる西湖の有する杭州と区別する古都の雰囲気は漂っており、その姑蘇城らしさには「水」が欠かせないことは言うまでもないであろう。友人の小沢碧童宛の書簡に「昔の姑蘇の都ですが稍頹廢の気味のある、人気の好い水の多い所です¹⁷」と記しているところからも、古都だった蘇州やその「水」に対する芥川の特別な思いが窺えよう。

ところで、芥川のこのような江南の「水」に対する執着は、中国の古典文学や漢詩、南画を通して形成された江南像と切り離せない。一例を挙げると、芥川が中国旅行に出かける直前に著した「奇遇」という小品は、中国の古典『剪燈新話』¹⁸の「渭塘奇遇記」を素材にし、江南の地である「長江に臨んだ古金陵」と「渭塘のほとり」を舞台に設定している。主人公の才子王生は佳人の少女と出会った日のことを回想中に、水郷の景色が浮かび上がる。「舟が渭塘のほとりまで来ると、柳や槐に囲まれながら、酒旗を出した家が一軒見える。朱塗りの欄干が画いたように、折れ曲っている容子なぞでは、中々大きな構えらしい。そのまた欄干の続いた外には、紅い芙蓉が何十株も、川の水に影を落している。¹⁹」また、芥川はある書簡でも、「蘇州は杭州より遙に支那的なり 水に臨める家家の景色は直に聯芳楼記を想起せしむ²⁰」と書き、蘇州の水

郷風景は「聯芳樓記」と結びついている。杜荀鶴の詩「送人游吳」は「君姑蘇に到りて見る 人家尽く河に枕むを 古宮間地少なく 水港小橋多し²¹」と蘇州の「水」を唄い、『唐詩選』に熟した芥川の心象に水郷としての蘇州像が幼少の頃から植え付けられていたと推察しうる。蘇州の紀行文のなかでも天平山景は南画のように感じ取られ、その一景としてやはり「水」が描かれている。

おまけに窓に倚つて見れば、山藤の靡いた崖の腹に、ずつと竹が群つてゐる。その又遙か山の下に、池の水が光つてゐるのは、乾隆帝が命名した、高義園の林泉であらう。更に上を覗いて見ると、今登つた山頂の一部が、かすかな霧を破つてゐる。私は窓によりかかりながら、私自身南画か何かの点景人物になつたやうに、ちょっと悠然たる態度を粧つて見た。(全集八、259-260頁。)

南画の景を発見したこの嬉しさを、芥川は、当時親交を結んでいた主治医、書画に関心が深い下島勲にこう書き送っている。「外はともかくも蘇州だけは先生におめにかけたい」、「天平山の如きは一山南画中の山景です」²²。このように、とりわけ「水」が象徴する詩的で、古都らしい蘇州の一面には中国体験前の芥川の初期の中国像が下地となっており、「支那趣味の愛好者」としての芥川龍之介は確かに存在していた。芥川にとっての姑蘇城の「水」は民国十年の中国において稀に支那趣味の醍醐味を味わえる古典的なものであり、そこから芥川は水郷の蘇州を「江南第一」と賛賞し、積極的にその「水」に関する散文詩の創作も行っていたのである。

しかし、姑蘇城の「水」に親しみや愛着を持つことは「支那趣味」にとどまるものでなかった。それは芥川の中に「水」の記憶を呼び起こしたと考えられる。芥川の初期習作と言える「大川の水」（「心の花」大正3年4月）と「松江印象記」（「松陽新報」、題「日記より」大正4年8月）両作には、少年芥川の「水」と「都市」についての感触や思考が書き込まれ、それは後年の姑蘇城の「水」及び江南体験と緊密な関連性を持っていると推測されるのである。芥川は蘇州の「水路だけは実際美しい」と評し、日本の松江に相当するが、「あの白壁の影が、狭い川に落ちている所は、松江でもちょっとみられそうもない」と感服した。今までの研究には、蘇州の「水」から同じ水郷である松江の「水」が想起されたことから、両者の類似性についての論述は見られるが、上述のような伝統的な水郷の印象は松江よりも、隅田川に依るところが大きいと本稿は考える。

「大川の水」は芥川の「自己を語った最初の文章²³」であると思われ、冒頭の文では、「幼い時から、中学生を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうに、あの川を見た。水と船と橋と砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮らしてゐるあわたゞしい人々の生活とを見た」と回想している。長年にわたって見てきたその水の風景は「如何に自分の幼い心を、其岸に立つ楊柳の葉の如くをののかせた事であらう」というように、また「大川の水に撫愛される沿岸の町々は皆自分に

とって、忘れ難い、なつかしい町である」ことが説明され、大川の水にまつわる自然と生活の情景は芥川の生い立ちにおいて決定的な風景であったと言える。芥川はその懐かしい下町の空間について次のように回顧している。

是等の町々を通る人の耳には、日をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた、柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに、青く光る大川の水は、其冷な潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる、懐しいひゞきをつたへてくれるだらう。〔…〕

殊に此水の音をなつかしく聞く事の出来るのは渡し船の中であらう。自分の記憶に誤がないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。(全集一、27頁。)

この引用文から、芥川が懐かしく回想する故郷の隅田川周辺の風景は、「白壁」「家」「柳」「水」「船」「橋」などの風物からなっていることが明らかであり、その風景は、まさしく前述した蘇州、すなわち伝統的な江南水郷のイメージと重なっている。蘇州の「水」に代表される古典的な、中国らしい江南水郷への愛着には、まず、中国の古典文学や漢詩、南画から得た趣味的江南像が働き、松江の印象が付着しているように思われるが、さらにその奥底には自分が育った故郷東京の隅田川のイメージが流れていたと考えられるのである。「大川の水」の結尾のところで、芥川は「大川」の水が象徴する「東京」という都市を愛する自己を次のように語っている。

「すべての市は、其市に固有なにほひを持つてゐる。フロレンスのにほひは、イリスの白い花と埃と靄と古の絵画のニスとのにほひである。」(メレジュコウスキイ)もし自分に「東京」のにほひを問ふ人があるならば、自分は大川の水のにほひと答へるのに何の躊躇もしないであろう。独にほひのみではない。大川の水の色、大川の水のひゞきは、我愛する「東京」の色であり、声でなければならぬ。自分は大川あるが故に、「東京」を愛し、「東京」あるが故に、生活を愛するのである。(全集一、30-31頁。)

大正10年に訪れた中国の江南において、姑蘇城の水郷に心を奪われた芥川はデジャビュを体験したような心境になったのではないか。蘇州の「暮色に煙つた白壁や新樹、その間を縫つた水路の光、——僕はそんな物を眺めながら、遠い蛙の声を聞いてみると、かすかに旅愁を感じたものだ²⁴」と告白した芥川は、遠く離れた故郷の東京、自分が育った隅田川を想起し、望郷の念にかられたのではないであろうか。

3. 荒廃都市の面影

蘇州の「水」に芥川がノスタルジアを感じたのは、単なる偶然であるようには思えない。芥川が北寺の塔上から見下ろした「黒い瓦屋根の間に、鮮かな白壁を組みこんだ」蘇州の市街や、旅館の窓から眺めた「夕明りの中に黒み渡った、侘しい瓦屋根ばかり」の夜景に、確かに「三越の屋上から見下した、限りない瓦屋根に漂つてゐる」「最も日本らしい寂しさ」²⁵が潜んでいる。また、蘇州の町の中を「東京ならば浅草の仲店」にたとえ、明・清代江南文化の中心とされる玄妙観の風情を明治の浅草寺と彷彿させるところには、都市を流れる「水」と、「水」に隣る象徴的な建築物とからなる同じ構図が読み取れるであろう。芥川が明治の隅田川の面影に重ねた蘇州は民国10年の当時、すでに近代都市の趣が濃い大正10年の東京と異なる一面を呈していた。

「蘇州城内（上）」の冒頭には芥川が驢馬に乗って蘇州の町の中を走っている場面が描かれ、芥川の蘇州は「驢馬も通る、轎子も通る、人通りも勿論少くはない」都市であった。しかし、蘇州における最初の体験には、その前に滞在していた上海や杭州とは大きな相違が認められる。上海に到着し、「埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我我を包囲した」り、杭州では「宿引きの命令通り、停車場前の人力車に乗った」りしたが、蘇州では乗り物に人力車はまったく登場しない。「文明開化」とともに誕生し、その利便性と実用性から近代都市文明の象徴とされる人力車が、驢馬や轎子にかわって主な交通手段として使われていた上海と杭州の様子に反し、人力車の見えない蘇州は「落伍」の一端に置かれている。

また、上海の城隍廟と蘇州の玄妙観と比較して、芥川は次のようにまったく異なった都市の性格を描き出している。

観前の広場に露店の多い事は、上海の城隍廟と違ひはない。うどん、饅頭、甘蔗の茎、地栗——さう云ふ食物店の間には、玩具屋や雑貨屋も店を出してゐる。人出も勿論非常に多い。が、上海と違ふ事は、これ程ぞろぞろ練つてゐる中に、殆洋服の見えない事である。のみならず場所も広いせゐか、何だか上海のやうに陽気でない。華やかな靴下が並べてあつても、蕪臭い湯気が立つてゐても、いや、漆のやうに髪が光つた、若い女が二三人、鶯色や薄紫の着物の尻をわざと振るやうに歩いてゐても、何処か鄙びた寂しさがある。私は昔ピエール・ロティが、浅草の観音に詣でた時も、こんな気がしたのに違ひないと思つた。(全集八、251頁。)

玄妙観前の広場は上海の城隍廟と同様に露店と人で賑やかな光景であったが、上海の西洋化と異なる蘇州の「寂しさ」は、まず「殆洋服の見えない」視覚上の荒涼に由来したと思われる。衣食住と交通の面において「洋服」と「人力車」が象徴する「新文明」から離れた蘇州の地には、まだ「老大国」の文明が強力に根を張っていたと推測できよう。ところが、ピエール・ロティと共通した芥川の「寂しさ」は実際、まさに伝統文化の退廃によるのではないか。ロティは1885（明治18）年に浅草を訪れ、当時の見聞を短編集『秋の日本』の「江戸」という一章に

残しているが、そこには「音の洪水一両替屋、仏画や教典や花を売る人たちの声、駆け回る子どもたち、鳩の羽ばたき、賽銭箱に投げ入れられる小銭などの音—が神聖な場所を侵している」²⁶という場面が描かれている。ロティは「この寺から《商人たちを追い払う》ことは必要でもあろう²⁷」と批判した。「音の洪水」によって邪魔された浅草観音へのお参りは本来、日本伝統文化の象徴であり静寂の行き渡ったなかで行われるという印象が存在した故に、ロティは上述したような伝統の破壊に「寂しさ」を感じたのであろう。

そして、江南文化の中心であった玄妙観を見物した芥川は、観前の騒がしさを目にしたのち、「その群衆の中を歩いて行ったら、突きあたりに大きい御堂があつた。これも大きい事は大きい、柱の赤塗りも剥げてみれば、白壁も埃にまみれてゐる。その上参詣人もこの堂へは、たまに上つて来るばかりだから、一層荒廃した感じが強い²⁸」と観察している。このように、繁栄した商売の風景の仄めかす文明の荒廃に、芥川はロティと同じ「寂しさ」を抱いていたと考えられる。上海の「世界的な群衆」像は「西洋人や支那人が気忙しさに歩いてゐる」近代的大都会の縮図である。その対極に置かれた蘇州の「群衆」像は、「洋服の见えない」中国人の〈百姓²⁹〉像であろう。近代化の波に乗り遅れたこの老大国らしい都市から感じ取った、手入れの行き届かない様子に加え、人気のない荒涼としている古跡の「寂しさ」の底に潜んだこの国の現実を、芥川は見抜いていたのである。

古代の教育模範の蘇州文廟について芥川は、「此処は明治七年に再建されたとは云ふものの、宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廃は、直に支那の荒廃ではないか？しかし少くとも遠来の私には、この荒廃があればこそ、懐古の詩興も生ずるである。私は一体歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？³⁰」というように蘇州における古跡の荒廃に注目し、廟内にある埃だらけの古風楽器を眺めながら「甚しいかな、礼樂の衰えたるや。」と深く感慨した。芥川は蘇州の都市空間を通じて老大国の文明の荒廃を痛感し、「寂しさ」から懐古の念が惹き起こされ、詩「休言竟是人家国。我亦書生好感時。³¹」をかりて自嘲したのである。また、孔子廟の見物に出かける途中でも、

疲れた驢馬に跨りながら、敷石の間に草の生えた、廟前の路へさしかかると、寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、蔦蘿や草の茂つたのも見える。その空に点点と飛び違ふ、この辺に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫万古の意とでも形容したい、哀れにも嬉しい心もちになつた。(全集八、253-254頁。)

という、荒廃した瑞光寺の光景を目撃し、「蒼茫万古」の意味する懐古の心境になつた芥川は、虎邱について「この塔もとうに朽廢してゐるから、一層毎に草を茂らせてゐる。それに何だか無数の鳥が、盛んに啼き声を飛ばせながら、塔のまはりを繞つてゐたのは、一段と嬉しかつたのに違ひない。³²」という広々とした光景に、再び「蒼茫万古」の心持ちを感じている。上海と

杭州の都市空間のなかに蔓延していった西洋式の建築物を「下等なもの」、「俗悪なもの」³³と捉える芥川は、それよりも、古跡の荒廃した様子が詩人らしい懐古の情緒を与えてくれることに嬉しさを感じたのに違いない。例えば、「誰でも江南へ遊んだものは、必寒山寺へ見物に出かける」と言われる、この「一番日本人には馴染の深い寺」は、芥川が訪れた時点ではすでに再建され、「本堂と云はず、鐘樓と云はず、悉紅殻を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢやない³⁴」、というように変わってしまった現実を目撃し、芥川は懐古するどころか落胆したのである。このような破壊と再建について、かつて松江の旅行に行った際、芥川は「新文明」の実利主義が古い時代の建築物へ及ぼす影響を次のように述べている。

寺院の堂塔が王朝時代の建築を代表するやうに、封建時代を表象すべき建築物を求めるとしたら天主閣を除いて自分達は何を見出す事が出来るだらう。しかも明治の維新と共に生まれた卑む可き新文明の実利主義は全国に亘つて、此大いなる中世の城樓を、何の容赦もなく破壊した。自分は、不忍池を埋めて家屋を建築しやうと云ふ論者をさへ生んだ嗤ふ可き時代思想を考へると、此破壊も唯微笑を以て許さなければならぬと思つてゐる。(全集一、140頁。)

「新文明」が浸透して行くうちに、上海でも杭州でも「支那趣味」の面影を感じない「ヤンキー趣味」の満ちた西洋式の建築物が相次いで建てられ、名所古跡の荒廃や破壊が進み、さらに古い時代の象徴物である蘇州の寒山寺も再建によって本来の面目を失っていった。明治維新以降の日本で目撃した歴史を、芥川は再び民国 10 年の中国で実感することになったのであろう。

19 世紀後半、太平軍の攻撃と清政府による回復が繰り返されていくなか、蘇州は戦争によって巨大な破壊と打撃をうけ、荒廃都市の面貌を呈していた。そして、それを背景にした芥川の蘇州体験には、「寂しさ」と懐古の情が始終漂っており、後年、中国旅行について語った、「今度初めて支那へ渡りましたが、来て見るとモット早やく来れば好かつたと思ひました。支那は早く来ないと時と共に段々古いものが破壊されて行きます。殊に南方は革命が相續いて起るので古い建物の如きは殆んど破滅されて了つて居ります。³⁵」という感慨は、まさに当時の蘇州の都市空間に接して発したものであつたのであろう。

また芥川は、孔子廟の「梁間の暗闇に飛んでゐる」夥しい数の蝙蝠そのものに対する日本人の印象の変遷について、次のように述べている。

蝙蝠は日本でも江戸時代には、気味が悪いと云ふよりも、意気な物だと思はれたらしい。蝙蝠安の刺青の如きは、確にその証拠である。しかし西洋の影響は、何時の間にか塩酸のや

うに、地金の江戸を腐らせてしまった。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て来て浜の夕涼み」の唄には、ポオドレエルの感化があるなぞと、述べ立てる批評家が出るかも知れない。(全集八、256頁。)

先述した「新文明の実利主義」と同様に、芥川は近代化に伴う西洋の影響がもたらす芸術への破壊力を警戒し、東アジアの芸術の行く末にアイロニカルな視線を投げているのである。

4. 民国10年を生きる<百姓>

本稿の冒頭で述べたように、中国視察旅行後における芥川龍之介の中国物作品に見られる変化の代表作として、中国の民衆や社会への現実的な目線で著された短編小説「湖南の扇」(初出「中央公論」大正15年1月)が挙げられる。この作品は大正10年の中国旅行を素材にし、小説の舞台を「革命家の揺籃」と言われる中国長沙に設定したものであり、語り手の「僕」が「情熱に富んだ湖南の民」、芸者玉蘭と出会った物語である。玉蘭は首を斬られた土匪の頭目黄六一の情婦であり、「わたしは喜んでわたしの愛する……………黄老爺の血を味はひます」と言った後、黄の血を染み込ませたビスケットを噛み始めるシーンで、物語は最高潮に達する。この作品において芥川は、激動する中国社会を背景に、「負けぬ気の強い」一般民衆から感じた「革命の精神」に注目しながら近代中国の直面する難題に目を向けている。

主な先行研究は、この作品の「執筆モチーフは湖南の民、すなわち中国人民への関心である³⁶」とし、「革命家の性質を持っている」「反政府側の人間」という土匪黄六一とその情婦の玉蘭に注目している³⁷。それに対し、本稿のこの小説への視座は、芥川の中国体験の波及の解明である。芥川が中国民衆へ大きな関心を最初に示したのは蘇州旅行の時であり、また、一般民衆の「革命の精神」と深くかかわる排日の現象が大きく取り上げたのも長沙ではなく蘇州にいる時であったのである。『支那遊記』には長沙体験の記録はほぼなく、その全部が「雑信一束」のなかに収録されている。以下に長沙関連部分を挙げてみる。

- ① 往來に死刑の行はれる町、チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鶏さへ僕を脅すやうに「アクタガハサアン！」と鬨をつくる町、……………(六 長沙)
- ② 長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を參觀。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰ふ。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達

もここの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起した後ですから」！（七学校）

『支那游記』のほかにも滝井孝作宛の書簡に、③「長沙は湘江に望んだ町だが、その所謂清湘なるものも一面の濁り水だ 暑さも八十度を越へてゐる バンドの柳の外には町中殆樹木を見ぬ 此処の名物は新思想とチブスだ³⁸」と書かれている。しかも、上記の見聞は実際、中国旅行に関する手帳のメモに記されており、「湖南の扇」の描写との一致も認められる。ただ、②に書き残された女学生の箇所は、手帳のメモにも見られるものの、「排日」というようにそれと直接に関連する記録は見当たらない。長沙メモの「女学生——白帽、髪切れる故——油紙の傘——写生道具³⁹」というメモからもわかるが、当時の「女学生」は「一般民衆」と異なる存在として見なされていた。このように芥川は長沙の紀行文や手帳に「女学生」を描写したものの、「女学生」や「革命家」以外の、いわゆる「一般民衆」には言及していないのである。

以上のように、芥川が目撃した長沙の排日運動は主に女学生が象徴した非一般民衆によるものであるなら、「一般民衆」からその「革命の精神」を読み取る可能性が暗示された「湖南の扇」における人物設定は別のところに由来すると考えられよう。前述したとおり、中国旅行を経た芥川の関心が現実社会へと転向するプロセスにおいて蘇州体験が大きな役割を果たしたことをここでも勘案しなくてはならない。

周知のとおり、芥川の中国旅行は1919年の五四運動の発生と1921年7月に中国共産党の成立との間に挟まれたナショナリズムの高揚を背景としている。そのなかで蘇州の天平山を見物した時に目撃した排日の現象を、芥川は紀行文のなかで初めて大幅に書き記したのである。「天平と靈巖と（上）」は、「天平山白雲寺へ行つて見たら、山に倚つた亭の壁に、排日の落書きが沢山あった。「諸君爾在快活之時、不可忘了三七二十一条」と云ふのがある。「犬与日奴不得題壁」と云ふのがある。〔…〕更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁。何来不共戴天仇。恨無十万横磨劍。殺尽倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。」から始まり、そこを去った後も落書きの一つ「天平地平、人心不平、人心平平、天下泰平。」⁴⁰を口にしていた。実際、芥川は目に入ったこのような情熱の溢れる排日の落書きをそのまま手帳に書き込み、また紀行文の創作にそのまま使った。日本商品を駆逐しようとする行為よりも、排日の現象が文学の形で現れた姿に芥川は衝撃を受けたのである。

天平山から靈巖山へ向かう途中、芥川は「実は社命を帯びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や美人に縁のある所は、一つでも余計に見て置いた方が、万事に好都合」ではあろうが、「さもなければ私の旅行は、もつと支那人の生活に触れた、漢詩や南画の臭味のない、小説家向きのものになつたのである。」⁴¹と告白している。排日の落書きを実際に目撃した芥川は蘇州の名所古跡を巡り回ることに飽き、初めて中国の民衆に近づきたいという思いに強く駆られたのではないかと推察できる。

こうして、蘇州紀行の中で芥川は、上海や杭州での滞在とは異なって、日本人や西洋人には目を向けず、中国の「一般民衆」の生活に関心を集中し、その見聞を細かくメモに残し、また紀行のなかに描いたのである。そのメモの中には、「青衣、テン足の老婆。」「女子、アバタ。」「盲人の胡弓。」「轎子の美人。」「驢上の客。」「藻をとる男。」「辮髪の男。」「深青衣濃青袴の杜氏。」など⁴²のような短文が認められる。紀行文においても「一般民衆」の生活へ注目する芥川の視線が顕著である。

しかし獅子山の裾か何かの、寂しい村を通った時、うつかり一錢投げてやったばかりに、村の子供だの女だのが、いづれも手をさし出しながら、驢馬のまはりを取り巻いたのには、少からず難渋した。如何に柳が垂れてゐたり、女が刺繍をしてゐたりしても、敬服ばかりすべきものぢやない。その村の白壁の一重内には、丁度巢を食つた燕のやうに、恐るべき娑婆苦が潜んでゐる。（全集八、258頁。）

ここで、ジャーナリスト芥川は確かに空気の変化に敏感に反応し、社会の現実を見抜いている。蘇州は確かに「支那趣味」の薫り高い江南水郷の風景が展開しているものの、その裏では、「一般民衆」が貧困の生活にもがいている。それらの人々はまた、民国10年という革命の気運が高まりつつある時代を生き、芥川から見た彼らの抗日運動は「自身の中から自然に生まれ出た抵抗⁴³」なのである。こうした認識は次の引用文に見られる芥川の愛読書『水滸伝』の真髓と一致する。芥川は玄妙観で武芸の試合を鑑賞して、次のように書いている。

堂を後へ通り抜けると、今度は其処の人ばかりの中に、両肌脱ぎの男が二人、両刀と槍との試合をしてゐた。〔…〕何でも病大虫薛永とか、打虎将李忠とか云ふ豪傑は、こんな連中だつたのに相違ない。私は堂の石段の上に、彼等の立ち廻りを眺めながら、大いに水滸伝らしい心もちになつた。（全集八、251-252頁。）

芥川はこの武芸の試合から、『水滸伝』に登場した百八人の豪傑を想起し、またそれが眼前の「一般民衆」の人物像と重なっていった。それらの豪傑は「忠臣義士」よりもむしろ「放火殺人」の悪行でも容易に手を染める「無頼漢」である。「湖南の扇」の中で革命の性質を与えられた「悪党」の土匪黄六一もこうした豪傑に入るに違いない。「水滸伝らしい」心持ちになつた芥川は、次のように中国人の精神について論じている。

つまり彼等の間には、善悪を脚下に蹂躪すべき、豪傑の意識が流れてゐる、模範的軍人たる林冲も、専門的博徒たる白勝も、この心を持つてゐる限り、正に兄弟だつたと云つても好い。この心----云はば一種の超道徳思想は、独り彼等の心ばかりぢやない。古往今来支那人

の胸には、少くとも日本人に比べると、遥かに深い根を張った、等閑に出来ない心である。

ここで芥川が論じた、代々の中国人の本性に根差した「豪傑の意識」という「超道德思想」は、正しく「自然に生まれ出た抵抗」という抗日運動の原動力である。彼はこれが中国人という共同体に団結力と奮起する力、すなわち「革命の精神」を与え続けていることを読みとり、また「排日」の底流をなすと突き止めたのであろう。

蘇州の天平山で目撃した排日の落書は、中国の「一般民衆」へ注目する契機となり、また「湖南の扇」における創作の伏線として機能した。芥川は、芸者や土匪、女学生や革命家という身分の違いを越えて中国人全体に流れる「革命の精神」を認識したのであろう。「湖南の扇」が示しているように、中国視察旅行を体験した芥川の関心は、中国の古典文学や漢詩、南画が代表する「支那趣味」の世界から、現実の中国で行われている社会運動へと転向していったが、そのプロセスにおいて蘇州は、彼の中国認識の転換点として位置づけられるのである。

5. おわりに

本稿は、芥川龍之介の中国視察旅行とその紀行文『支那遊記』を中心にして、江南体験とその中から浮かび上がる蘇州の特殊性に注目し、〈水〉〈建築物〉〈百姓〉という三つの側面における蘇州の表象について考察してきた。芥川の描いた蘇州は、明治の隅田川の面影が重ねられる江南水郷式の古都であり、また、上海や杭州が代表する近代都市とは異なり「落伍者」であった。しかしそればかりではなく、芥川は、民国10年の蘇州で、排日運動の激化、中国人の「革命の精神」を肌で実感しながら、その地で生活する一般民衆と現実社会への関心が高まり、「湖南の扇」の創作へ導かれていったのである。このように「新思想」と「旧文明」の混在した異国の都市空間を様々な要素の中において捉える芥川の蘇州体験は、彼の中国像及び中国物の文学創作における決定的な変容を意味していると言えよう。

本稿では、以上のように、芥川の中国体験の主なる江南までの旅を中心に、先行論では明確にされていない蘇州の位相を探求してきたが、江南の地を離れ北へ旅をした芥川は、「眼界が一変して、見るものが総て大支那」であり、「私の考へでは将来此の大支那を統一して行く上に於ての都は矢張り北支那だろうと思ひます」⁴⁴と書き記している。芥川の鋭い洞察力も読み取れるその後の旅についての考察は、今後の課題としたい。

注

¹ 芥川の本文の引用はすべて『芥川龍之介全集』（全二十四巻、岩波書店、1995～1998年）に拠る。また、傍点、ルビを省略した。

-
- ² 『芥川龍之介全集』第十一卷、岩波書店、1996年、254頁。
- ³ 芥川龍之介「新芸術家の眼に映じた支那の印象」、『芥川龍之介全集』第八卷、岩波書店、1996年、3頁。
- ⁴ 図の出典：芦谷信和、上田博、木村一信編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰画—』、世界思想社、1992年、90頁。
- ⁵ 『大阪毎日新聞』1921（大正10）年3月31日付。
- ⁶ 薄田泣菫宛。『芥川龍之介全集』第十九卷、岩波書店、1997年、153頁。
- ⁷ 芥川龍之介「支那遊記」自序、『芥川龍之介全集』第十三卷、岩波書店、1996年、105頁。
- ⁸ 小澤保博氏の研究ノート「芥川龍之介「支那遊記」研究（上）」では、村松梢風、横光利一、犬養健に対する『支那遊記』の影響が具体的に論じられている。その影響力について竹内好の次のような論述からも裏付けられる。「私たち年輩のものは、中国のイメージをつくる上に谷崎さんの影響を蒙っている。（中略）芥川龍之介もほぼ同時代である。この人たちによってつちかわれたイメージが、私の中国観の根底にあるということが、前代と後代から自分を分ける世代の特徴になっているように思う。そのイメージに抵抗することを通じて自分なりのイメージを形成してきたのだから、私の中国観は根本において大正文学によって規制されている。」（『竹内好全集』第10巻、1981年、22頁。）
- ⁹ 関口安義『特派員芥川龍之介—中国でなにを視たのか—』、毎日新聞社、1997年、123頁。
- ¹⁰ 周芷冰「芥川龍之介『江南遊記』論：芥川が見た新しき「江南」、『人文論究』67巻2号、2017年9月、6頁。
- ¹¹ 『芥川龍之介全集』第八卷、岩波書店、1996年、216-217頁。
- ¹² 施小煒「芥川龍之介における「江南」、『江南文化と日本—資料・人的交流の再発掘—』、2012年3月、81頁。
- ¹³ 同注5。
- ¹⁴ 芥川道章宛。前掲注6、163-164頁。
- ¹⁵ ヴェネチアは、「少年」「江南遊記」「松江印象記」など、芥川のいくつもの作品に登場しており、当時の日本文壇においてもヴェネチアへの関心が高かった。芥川はイギリス、フランス文学から影響を受けており、彼のヴェネチアのイメージは、それらの文学作品によって構築されたところが大きいと言えよう。
- ¹⁶ この場合の「ヤンキイ趣味」は、西湖まわりにある西洋建築を指している。
- ¹⁷ 前掲注6、170頁。
- ¹⁸ 明代の詩人、瞿佑の怪異小説集であり、その中に「涓塘奇遇記」「聯芳樓記」などが収録されている。
- ¹⁹ 『芥川龍之介全集』第七卷、岩波書店、1996年、283頁。
- ²⁰ 岡栄一郎宛。前掲注6、171頁。

-
- ²¹ 石川忠久『漢詩をよむ 詩人と風景（都城の巻）』、NHK出版、1997年、146頁。原詩：「君到姑蘇見 人家尽枕河 古宮閑地少 水港小橋多」。
- ²² 前掲注6、171頁。
- ²³ 三好行雄「仮構の生—「大川の水」をめぐって」、『芥川龍之介論 三好行雄著作集 第三巻』、筑摩書房、1993年、7頁。
- ²⁴ 前掲注11、269頁。
- ²⁵ 前掲注11、273頁。原文：「何時かジョオンズがさう云つたつけ、最も日本らしい寂しさは、三越の屋上から見下した、限りない瓦屋根に漂つてゐる。」
- ²⁶ 小倉和子「ピエール・ロティの『秋の日本』考」、『立教大学観光学部紀要』第5号、2003年3月、130頁。
- ²⁷ ピエール・ロチ著、村上菊一郎、吉氷清訳『秋の日本』、角川書店、1953年、198頁。
- ²⁸ 前掲注11、251頁。
- ²⁹ 中国語で一般民衆を指す。
- ³⁰ 前掲注11、254頁。
- ³¹ 今関寿麿作漢詩、現代文訳「議論したってしようがないよ。結局人の国じゃないか。私も勉強している身のうえだ。この世の中に感慨をいただくのもむりはなかるう」（小澤保博氏「芥川龍之介「支那游記」研究（下）」、『琉球大学教育学部紀要』（78）、2011年2月、12頁。）
- ³² 前掲注11、269頁。
- ³³ 前掲注11、37頁。
- ³⁴ 前掲注11、267頁。
- ³⁵ 前掲注3、5頁。
- ³⁶ 前掲注9、199頁。
- ³⁷ 王書璋「「湖南の扇」論——黄六一を糸口にして」、『人文社会科学研究』第34号、9頁。
- ³⁸ 前掲注6、176頁。
- ³⁹ 『芥川龍之介全集8』、筑摩書房、1975年、155頁。
- ⁴⁰ 前掲注11、256-260頁。邦訳は「諸君儻在快活之時、不可忘了三七二十一条（諸君儻快活の時に在り、三七二十一条を忘了すべからず）」「犬与日奴不得題壁（犬と日奴壁に題することを得ず）」「莽蕩河山起暮愁。何来不共戴天仇。恨無十万横磨劍。殺尽倭奴方罷休。（莽蕩たる河山暮愁起こる、いづくよる来るともに天を戴かざるの仇、恨むらくは十万の横磨劍なく、倭奴を殺し尽くしてまさに罷休せん）」（前掲注9、121頁を参照した）。
- ⁴¹ 前掲注11、260頁。
- ⁴² 前掲注39、152-153頁。
- ⁴³ 江口渙『わが文学半生記』、講談社、1995年、252頁。
- ⁴⁴ 前掲注3、4頁。